

流域文化圏形成の研究

大木 昌

共同研究メンバー

- 大木 昌 (明治学院大学国際学部) コーディネーター
- 竹尾 茂樹 (明治学院大学国際学部)
- 森本 泉 (明治学院大学国際学部)
- 齋藤 百合子 (明治学院大学国際学部)
- 猪瀬 浩平 (明治学院大学教養教育センター)
- 戸谷 浩 (明治学院大学国際学部)
- 和気 一成 (東京女子学館大学)

2012年度の「流域文化圏形成の研究」プロジェクトでは、文献調査とフィールド調査の両面から、研究を進めてきた。

I 文献蒐集と文献研究

本研究は、河川が地域文化形成に大きな役割を果たしてきたのではないかと、という仮説に基づいているので、鉄道や車が普及する以前の人と物の移動に関する歴史的研究が中心となる。

2012年度には、文献資料の蒐集についていうと、いわゆる図書として出版されてきた文献以外に、フィールド調査の過程で、蒐集出来た史料もある。とりわけ、北上川の調査では、江戸時代の舟運に関する文献や絵図が、水沢市の民俗資料館博で蒐集できたこと、また、同様に、鹿児島県の川内川の調査では、川内市にある「鹿児島純心女子大学」の図書館が保有する、川内川の舟運に関する文献を多数蒐集することができた。

さらに、東京都江東区の「中川舟番所資料館」では、江戸時代の利根川水系に係わる川港（河岸）の分布の地図、および文献資料を入手することができた。

すでに、これまでの文献調査では、日本の本州、四国、九州において、舟運が行われていた河川の全体像を、ほぼ明らかにすることができた。大きな河では大正時代まで舟運が行われていたが、江戸時代まで遡ると、大きな河川だけでなく中小河川でも、ほとんどの河川では舟運が利用されていたことが分かった。

舟運が行われていた河川に関して重要な点の第一は、沿岸で生産された塩を内陸に運ぶ「塩の道」となっていたことである。塩は、冬の間の食糧を塩蔵するためにも欠かせない生活物資だった。塩とともに、沿岸部のさまざまな生活物資（特に衣類など）も同時に内陸に運ばれた。他方、

塩を内陸へ運んだ舟の帰りに、内陸の農産物や森林産物などが下流地域に運ばれた。一言で言えば、舟運が行われていた河川は「生活の道」だった、といえる。

第二は、主として米の運搬には可能な限り舟運が使われたことである。米 1 俵は約 60 キログラムであるが、1 頭の馬が運べる量は、せいぜい 2 俵であった。したがって、たとえば 100 俵あるいはそれ以上の年貢米などの米を陸路で遠隔地に運ぶには、50 頭あるいはそれより多くの馬と多数の馬方が必要だったから、舟が使える場所では舟運が利用された。

第三は、内陸の山地から平地へ、材木など嵩張るうえに重い物を運ぶにも、ほとんどの場合、河川を経由して舟あるいは筏で運ばれた。現実問題として、起伏が多い山間地を馬や牛に荷車を引かせて運ぶことは不可能に近かった。

以上のように、河川はモノ、ヒトの移動には欠かせない交通ルートであった。

次に、河川ルートを通じて、流域にどのような文化の交流があり文化圏が形成されたのか、という問題である。現在のところ、最上川流域の舟運と文化圏の形成に関しては、資料的にも実証的にも確認できた。以下の「紅花交易がもたらしたもの」は、このプロジェクトメンバーの一人、斎藤百合子氏による家族史的記述で、最上川の舟運と文化圏形成について具体的に示してくれる。

最上川の中流域から上流域にかけて、かつては紅花栽培が盛んで、江戸時代から大正時代くらいまで、紅花を買うために京都の商人が最上川を舟で上がってきた。中には、長期に滞在した京都の商人もいた。こうした交流が長い間続いて、最上川の奥深く京都の文化が山形県の内陸に運ばれ、定着していった。現在でも最上川上流域の村山地方に残る言葉と食べ物に、京都の文化的影響が残っています。

最上川流域の他にも、舟運と文化の伝搬や文化圏形成の事例は幾つもある。たとえば、四国の土佐湾に面した地域では、川に沿って熊野神社が集中的に分布している〔北見俊夫 『川の文化』 日本書籍、1981:169〕。ここでは、熊野信仰が川筋に沿って内陸に浸透していったことが確認できる。信仰の面では、天竜川中流部に沿った長野県南部と、下流部の奥三河、静岡県遠州で、「花祭り」という祭りと神事が室町・鎌倉時代から現在までも続いている。

言葉の面では、方言の分布がやはり川沿いに形成されたと考えられる。たとえば静岡県の方は興味深い。方言学の分野では、長野県、山梨県、静岡県三県の方言は、「ナヤシ方言」と一括して区別される〔平山ほか、『現代日本語方言大辞典 第 1 巻』明治書院、1992 年：181〕。静岡県でみると、西から天竜川、大井川、安倍川、富士川と主要な 4 河川があり、うち、安倍川を除く 3 河川には大正期まで舟運があった。また、安倍川には舟運こそなかったが、静岡の中心から川沿いの道を北上し、安倍峠を越えると、山梨県に至るルートがあった。こうして、河川あるいは河川沿いの陸路が古くから人の交流ルートとなり、「ナヤシ方言」が形成されてきたものと思われる。方言と河川流域文化圏との関係については、さらに調査研究が必要である。

II フィールド調査

2012年度には以下のフィールド調査が行われた。

1) 2012年4月8-9日 奈良県の平城京と大和川に関する予備調査 大木単独（自費）

奈良の都、平城京は、奈良盆地の真ん中にある内陸の都であるが、水運のアクセスが全くなかったとは考えられない。文献によれば、瀬戸内海から大和川の支流である佐保川を舟で遡り、平城京内部まで舟で来たことがわかった。これを確かめるため、平城京周辺の河川の状態を調査に行った。現在でも佐保川は、平城京の西側を南北に流れていることは確認できた。この川を含め、奈良盆地の河川についてはもっと緻密な調査が必要であることが分かった。

2) 2012年5月6-7日 盛岡と平泉を中心とした北上川の舟運と文化に関する予備調査 大木単独（自費）

テレビのドキュメンタリーで紹介された、北上川を經由した舟運に関連して、上流の主要な河岸であった盛岡と、藤原3代の本拠地で、北上川中流域の主要な河岸でもあった平泉の調査を行った。これは、夏に他のプロジェクトのメンバーと調査するための予備調査だった。

盛岡では、珍しい舟橋（川に舟を並べてその上に板を渡し、人や荷車を通した、一種の浮き橋）を確認し、確かに太平洋からここまでは舟の往来が、古くからあったことを確認できた。また、藤原氏の本拠地、平泉は北上川の土手の隣に位置していたこと、平泉は通常、都から離れた山中の金色堂が有名で、あたかも内陸の都市のような印象を受けるが、実際には北上川沿いの重要な交易の港（河岸）でもあったことを確認した。しかし、この時にはまだ発掘の途中であり、全容は今後の調査を待たなければならない。

3) 2012年5月13-14日 三重県の三滝川流域の調査 大木単独

三重県の文化は、大きく分けて名古屋（中京）文化圏と関西文化圏に分かれるが、その境界がどの辺りにあるのかを確認するために、予め、ある程度の情報を集めておいて、三滝川あたりではないか、との感触を得て、現地の調査を行った。

言葉に関しては確認できなかったが、食文化に関しては、特に中京圏の「赤だし味噌」と関西圏の「白みそ」が同じくらい利用されている、両文化の混在地域であることが分かった。ただし、中京圏と関西圏の境界に関しては、言語圏の問題も含めて、再度調査が必要になるとの印象を得た。

流域文化圏の研究にとって重要な問題は、河川が文化圏の形成に大きな役割を果たした場合と、逆に河川が文化圏を分ける役割を果たす場合があるのではないかと、という視点をもつことである。

4) 2012年6月10-11日 新潟県村上市の三面川 大木単独

新潟県村上市に河口をもつ三面川は、古くからサケ漁が盛んで、この流域はいわば「サケ文化

圏」ともいうべき食文化をもっている。地元の方と、河口から上流まで車で流域の様子を見ることができた。この川の流域では下流から中流域にかけては共通の「サケ文化圏」が形成されている。とりわけ、サケを丸ごと乾燥した製品は、村上市を中心に新潟県のかなり広い地域で消費されており、この地域の食文化の一角を占めている。

もう一つ、大切な点は、(恐らく途中まで舟で遡り)あとは三面川に沿って山形県方面に抜ける陸路があったことも確認できたことである。ここでも、河川と河川沿いの陸路が他の地域との交流のルートとして利用されてきたことが分かる。

5) 2012年7月30日 - 8月1日 青森県新城川、岩木川、北上川流域調査 大木、竹尾、齋藤

平泉を拠点とした藤原氏が、北上川の舟運を利用した交易を行っていたことが、近年、発掘品によって明らかになった。交易の一つは、北上川を舟で下って太平洋に出て、京都、博多に寄港して行く中国の宋との貿易であった。もう一つは、北上川を上り、遡行限界地点から、陸路で北大道を北上し、最終的には陸奥湾に注ぐ青森県の新城川の上流に出て、北海道のアイヌとの交易、さらにはアイヌを経由して、シベリア大陸のアムール川流域との交易であった。今回は、藤原氏の出張所があった青森県の新城川の河岸を確認し、岩手県の北上川沿いに車で平泉まで、途中の都市や鉱山跡、河岸をたどった。

北上川沿いの水沢市の郷土博物館で入手した、江戸時代の北上川の舟運に関する文献と絵図には、当時の北上川に面した河岸の所在と、舟運を監視・監督した舟番所の所在地などが記載されている。

6) 2013年2月23 - 25日 鹿児島県川内川 大木

川内川は、鹿児島県随一の河川で、熊本県白髪岳を源流とし、熊本県の東シナ海に注ぐ。全長137キロで、九州では2番目に長く、流域面積は1600㎡で5番目に大きな川である。流域には多数の盆地と狭窄部が連続している。これらの盆地には、人口と資産が集積している。

川内川では、現在も川舟がさまざまな目的で使われており、今回の調査でも多数の川舟を目撃した。流域文化圏の形成という観点から見た川内川の特徴は、川筋に沿って都市とそれに付随する河岸が発達しているのではなく、上流域に展開する多数の盆地が、陸路を経由して川内川と結ばれ、外部世界と交流していたことである。これは、流域文化圏の形成に関する、一つのタイプとして抽出できる、と考えられる。

7) 2013年3月26 - 28日 大阪-奈良-京都(大和川、木津川、宇治川)調査 大木、竹尾

4月の予備調査で、平城京の西側を流れる大和川の支流、佐保川を確認したが、さらに広範囲の舟運の実態を知るために、現在、大阪湾に注ぐ大和川を河口から遡ることにした。今回の調査では、文献と照らし合いながら、川幅や水量などを実際に見て、大和川は平城京まで舟の航行が可能であることが確認できた。

また、大和川の4本の支流が合流する「川合」という場所（この地名がその地理的状況を物語っている）には、「廣瀬神社」という大きな神社があり、奈良時代には歴代の天皇が参拝に訪れていた。

廣瀬神社の境内にある説明によれば、廣瀬神社の西側には港があり、瀬戸内海から大和川を遡って持ち込まれた輸入品や、逆に奈良盆地とその周辺から（おそらく木津川や宇治川の流域の産物も含めて）が持ち込まれた文物が交換される商業中心地となっていた。廣瀬神社の縁起に書かれているこれらの事実は、当時の奈良にとって、舟運が以下に重要であったかを物語っている。

III 2013年の課題

2013年度には、河川としては関東の大河、利根川水系（本流の他に、渡良瀬川、鬼怒川などの大きな支流を含む）、阿武隈川、信濃川、四国の河川を一つ、中国地方の河川を一つのフィールド調査を考えている。

また、テーマとしては、「江戸という都市を支えた人との物の交流」と「塩の道」を中心に、この下半期では、これらのうち主要な河岸（利根川水系だけでも200以上を数える）を取り上げて、江戸時代の流域文化の形成との関係を調べる。

※本報告書は、国際学部付属研究所共同研究「流域文化圏形成の研究」の中間報告書である。